
会社ごっこ

三塚 ユニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会社ごっこ

【Nコード】

N5576D

【作者名】

三塚 ユニ

【あらすじ】

倒産してしまった会社を舞台に繰り広げる、コメディタッチな出来事の数々……。嘘か誠かの境界線がアバウトではあるが、全て実話を元に書き下ろしました。あなたの会社でもこんなタイプの上司がいるのではないですか？キャラの濃い面々達がおおいに笑わせられます。仕事や人間関係で悩んでいるあなた！もっと哀れな会社がありますよ。さあ！この小説を読んで思い切り笑い、憤り、涙して感情の老化を防いで下さい。

第1話 やる気がでないのは？

今日も会社は活気なく始まった。空気が澱んでいる工場現場。整理整頓されずに撒き散らしてある製品。化学薬品が反応して出る鼻をつくような異臭。

もともと電燈も暗い製造現場なのに、少ない窓の前にまで紙袋の製品が積み上げられていた。それに追い討ちをかけるように、床の色のグレーが一層鈍よりとした空気をかもし出している。

智美は、そんな工場を歩く度に憂鬱な気分になるのだった。

「あーっ。何か楽しいことはないのかな？今日も暗い雰囲気・・・」
思い切り深呼吸でもして、この重い空気を一新させたかった。でも、そんなことをすれば鼻先からのツンとしみる臭いの刺激で目からは涙が出てきてしまう。今日の空気は尚酷かった。智美は自分の目が霞んでいるのかと思った。霧で視界が悪い訳ではない。湯気で向こう側が見えない訳でもない。工場の換気孔が故障していて、化学反応から出る煙りと、掃除を怠っているために何年も蓄積された埃や原料の粉が舞い上がって、まるで靄がかかったかの如く目をかすめているのだった。

「わっ。何？この息苦しさ…呼吸出来ないやん。」

いかにも体に悪そうな現場の空気に、智美は息を止めて速足で駆けて行った。現場で働いている人の中には、マスクもせずに作業をしている人もいる。この環境の中、重い製品を運んだり機械を分解したりの重労働はどれほど大変な事だろう。智美はそんな現場作業員に敬意をはらいつつも、この鼻につく吐きそうな臭いと息苦しい空気に、どうしても怪訝な顔つきになるしかなかった。爽やかな笑顔で「おはようございます」

なんて言えるような雰囲気ではない。挨拶をしてもこの環境の中、元気に返ってくる声などあるはずもなかった。

月曜日。お決まりの全体朝礼が従業員食堂で行われる。

「はーっ。今日から仕事が始まるのか。金曜日まで長いなあ。」

朝礼に行く時、女子従業員はみんなため息をつきながら朝礼に向かうのだった。130名の従業員のうち、8名が女性。少ないだけにとままりはあった。そのほとんどが各部署で事務をしている。事務と言っても簡単なパソコンへの入力作業が主な仕事だ。たいした仕事も与えられず、女性は愛想よくお茶くみをしていれば良い。といった封建的な考えが、まだこの会社では存在している。それだけに能力を発揮する事も許されない。だから、女子従業員のモチベーションは常に低く、仕事にやる気が出ないのは非常にもったいない事だ。智美も仕事が捗るように、気付いた事を何度か相談してみた事があった。しかし、決まってああだ、こうだと悲観的な考えに基づいて却下されてしまうのだ。

「つまらない。会社に来るの、怠いなあ。」

智美は、大きくため息をついた。ため息はあまり好きではなかった。何故なら周りの人にも不快感を与えるし、ため息をついたところでこの会社が変わって楽しくなるはずもないからだ。それは、幸せをみすみす逃がしているようで智美は極力ため息はつかないように心掛けていた。しかし、これから一週間、この会社で仕事をしないといけないのか。と思うだけで自然に漏れてしまった。

前では社長が小さな聞こえない声で、実績の数字らしき話を話している。最後列の智美からは従業員の様子が一望にして見る事が出来た。誰一人耳を傾けている人はいない。隣の者と喋る人、窓にもたれて外を見ている人、携帯をいじっている人、立ちながら目を瞑って寝ている人もいる。いずれにしても社長の話は馬の耳に念仏。といった具合だ。

ある日の午後。みんなでお弁当を食べ終わ

つて、お腹が満腹になつてきたところで智美は大きな睡魔に襲われた。隣で座っている総務課の静江は

コーヒーを飲みながら外を眺めてコックリと船を漕いでいた。山に囲まれた工場は、紅葉も色鮮やかに小春日和の淡い光に包まれていた。

「これは絶好のお昼寝TIMEやのに・・・」

会社で仕事をしているのがもつたいたないような天気を恨めしく思いながら、智美は憂鬱になるあの工場現場へと向かうのだった。

相変わらずの薄暗い作業場。匂いはいつもよりはマシなのは有難い。しかも、良い気候のせいもあつて幾分かすがすがしい気分で工場内を歩いていた。突然、どこからか大きな声がした。

「おゝい。おゝい！」

智美は声の元を探した。作業しているはしごの上から、体格の良いおじさまがこちらに向かって叫んでいた。現場で交代勤務をしている、金田さんだった。上から続けて叫んでいる。

「これでジュースでも買いや〜」

と言いながら固まりが頭上から降ってきた。ガムテープに百円玉を五枚貼付けて丸めた物が、智美の足元にポトリと落ちた。かなり驚いたが、

「えっ！いいんですか？ありがとうございます。」機械の騒音が煩いため、大声を張り上げながらそれを拾い、智美は深々と頭を下げた。

「また、無くなつたら言うておいでや」

智美は飛び切りの笑顔で手をあげた。正直こんな物が降つてこようとは夢にも思わなかったが、女性の人数が少ないせいもあつて自販機の前で出会っただけでも、ジュースを買ってもらえる事が度々あった。

総務の静江は鼻筋が通り、大きな瞳で綺麗な顔立ちをしているので、つねに男性従業員からおごつてもらっていた。だから自分のお金でジュースやコーヒーを買った事が一度もないのだった。目立った美人でない智美でさえも、現場を歩いていると何度かジュースをご馳

走してもらえた。仕事に関しては、あまりやり甲斐を感じなかったが、こんなに女性を優遇してくれる環境はなかなか居心地が良いものだ。

「今まで働いた会社でこんなにおごってもらった事ないな。今日は現場を歩いてラッキー」

本当に有り難かった。ジュースを買ってくれる人達には、何か別のかたちでお返ししなくちゃ。智美は、ガムテープから百円玉を一枚ずつはがしながら、小銭を入れているぬいぐるみの形をした財布に収めるのだった。

それから、金田は智美と会う度にジュースを買ってくれた。歩いていると後ろから

「おい。自販機に行こうか？」

と声を掛けられた。智美は

「ありがとうございます。いつも申し訳ないですね。たまには私がご馳走させていただきますよ。」

と言った。

「何言ってるねん。女性におごってもらたら男が廃るわ。遠慮せんでええから飲め。」

なんて男気のある人なんだろう！肝っ玉が大きいなあと智美はある種の尊敬の念をいだいた。そのうち冗談を言ったり、家族の事などを気さくに話す間柄になった。近くなるにつれ、金田が軽く体にタッチしてくるのは気になったが、やらしい下ネタで不快な思いをする事もなかった。それに何と言っても毎回気前よくジュースをおごってくれるし、バレンタインデーにチョコをあげるとびっくりするくらいのお返しがホワイトデーには待っていたので、気のいい『おじ様』だと信用していたのだった。

頬にあたる風が冷たく感じるようになったある日、智美は同じ事務所
の千佳と現場を歩いていると金田から手招きされた。

「えっ！私…？」

と自分を指差しながら聞くと金田は頷いて、再び手招きしてこっち
に来るように催促した。金田のところに小走りで行くと肩に手を回
して、

「ちよつとこっちに来てくれ」

と人気のないところに導かれた。肩に手を回された事でかなり違和
感を感じていたが、やらしい感じはしなかった。むしろいつも様
子の違う金田を見て智美は心配した。

「どうしたんですか？何か困った事でも…？」

「流石、智美ちゃんや。ワシの事ようわかつとるわ。あのな、実は
お金を工面でけへんか？」

「えっ！あの…お金ですか？」

智美は驚きを隠せなかった。あんなに羽振り良くいつもジュースを
おごってくれている金田からの意外な申し出に、かなり戸惑ってし
まったのだ。

「ワシのこれが、これなんや。」

金田は小指を立てた後で、右手をお腹の前で大きく半円を描くよう
に、出っ張る真似をした。えっ！それって蒲田行進曲のワンシーン
みたいやん…智美の脳裏にはそれと同じような映画の場面が過ぎつ
た。しかも金田は離婚して独り身と聞いている。家族がいないから、
気軽に女の子達にジュースをおごってくれているのだと智美は思っ
ていた。何が何だか疑問を整理しながら即答を求められている事に
気付いた。そうだ、お金を貸す話だった。現実引き戻されて智美
は何て答えたらいいのか考えていた。いつもおごってくれている。
可愛がってももらっている。そんな金田からのお願いを聞いてあげ

たいのは山々だった。ケチで渋っている訳ではない。ただ、お金の貸し借りのトラブルで、兄弟までもが仲たがいでいるのを見た事があるだけに、慎重にならざるを得なかった。

「あの…金田さん。私も力になりたいのですが、給料日前であまり持ち合わせもないんです。一万円くらいなら都合つけられそうですが、そんな僅かな金額でもよろしいでしょうか？本当にすみません。」

申し訳なさそうな智美を見て金田は、

「すまんのはこっちの方や。智美ちゃんにまでこんな事頼んで、ワシ情けないなあ。」

いつも大きな声で、堂々としている金田の影すら感じられないその態度は、気の毒に思えてきた。智美は今まで金田にしてもらった事を振り返っていた。2階からお金を落としてもらった事。機嫌の良い時は、ポケットにお札を数枚挟込んできて

「こんなの、頂く理由が見つかりませんから。」
と返そうとする智美に、

「ええからとっておけ！一旦出した物を男はしまえへんのや。遠慮せんと納めときや。」

と何度か頂戴した事。会う度に自販機にお金を入れてくれて

「好きなジュースのボタン押しや」

と買ってくれた事。どれも有り難く嬉しい気持ちにしてもらっていたのは確かだ。

「一万円、金田さんにあげよう！今までしてもらっていた事への感謝の気持ちで…返してもらわずに差し上げよう！」

智美はそう決意して、金田に明日お金を持ってくる事を約束したのだった。

次の日。お金の入った封筒を持って智美は工場の現場へと向かった。金田に渡す時、返金はしてもらわなくても良い事を伝えるつもりで……ところが、いつも作業している場所に金田の姿はなかった。智美は金田が居そうなところを探したがやはり見当たらない。同じ部署で働いている人に聞いてみると、金田は休んでいるという事だった。「約束してたのにどうしたんだろう？」

智美は不信感をいだいた。50半ば過ぎの金田は、離婚歴があると聞いている。本当に彼女がいて子供が出来たんだろうか？その上、最近は急な休みが多い……と課長の丸山がボヤいていたのを思い出した。あんなに羽振りよくて、気前の良い金田がお金に困っている。智美にまで頼みにくるくらいだからよほどの事だろう。「約束したんだから、とりあえず明日出勤してきたら渡そう。」

智美は、そう言い聞かせてお金の入った封筒をポケットにしまい、現場の休憩室に書類を持って行くために向かうのだった。

休憩室の中は、工場の中以上に空気が薄かった。ここは唯一、作業員の喫煙出来る憩いの場なのだ。普段誰もいない時は電気を消している。省エネのため、経費節約のためどこの会社でも最低限している対策ではあったが、それ以外に休憩しているのが外から見えてわからないのにも好都合だった。誰もいないと思って電気のスイッチを入れると、所狭しと5、6人が椅子に座っていたので、智美は驚いて「きゃっ！」

と小さく叫んだ。大きさにしてタタミ6畳くらいの細長い部屋で3人がタバコを吹かして喋っていた。窓のない休憩室は、煙の行き場がなくて白く靄がかかったように渦巻いていた。部屋の掲示板に張り付けられてある連絡事項が書かれた用紙や、出勤状況を記入する紙は、タバコのヤニで黄ばんでいる。そんな中で腕と足を組みながら椅子に座り、寝ている人もいた。息苦しさを我慢しながら、智美はわざと元気よく、

「すみません！ここに今日の仕上がりを書いて下さいね。お願いします。」

と言って立ち去ろうとした。早くこの空気から開放されたかったが、そうはさせてもらえなかった。

「あっ、智美ちゃん。ボールペン持って来てくれるか？」

「はいっ！ボールペンですね。すぐにお持ちしますね。」

「修正テープとカッターナイフの刃も頼むわ。」

「わかりました。」

「ワシには安全靴を発注しといてくれ。」

「はいはい。安全靴ですね。サイズを聞かせて下さい。」

「そうやなあ。今なんぼのサイズやる？」

そう言いながら、靴を脱いでサイズを確認し始めた。「あれっ？消えてしもてわからんなあ。」

「普段は、何センチの靴を履いてらっしゃいますか？」

「忘れてしもたわ。」

…… あーっ、息が苦しい。髪の毛に煙草の煙がかかっている。臭いが髪に皮膚に染み込んでいく……早く、早くこの空気から脱出したいよ。Help Me！……智美は心の中でそう叫びながら、おじ様が早くサイズを思い出してくれますように……と祈っていた。しかし

「ワシ最近物忘れがひどうてなあ。ほんまにわからんわ。」痺れを切らして智美は、

「じゃあ明日また仕上がり表を持って来ますので、ご自宅で靴のサイズを確認しておいてもらえますか？違うサイズを発注しても、足が痛くなつて作業に影響が出ますものね。」

「おお、そうしてもらえるか？悪いなあ、智美ちゃん。」

「いえ、お気になさらずに。」KBR と言いながら、このまま休憩室にいると肺ガンに侵される事間違いないか？というのを気にせずにはいられなかった。

「じゃあ、ボールペンなどの事務用品は後ほどお持ちしますね。」

そう言いながら、休憩室を足早に出ようとした智美に再び、KBR 「せや、智美ちゃん。金田の事知ってるか？」と声をかけられ

た。金田の名前を聞いて思わず足を止めた。出て行こうとしていた休憩室に戻りながら、

「金田さんがどうかしたんですか？」

「あいつ、今日も休んで競艇に行ってるんや。最近休んでよう行つとるわ。」

「えっ！金田さんって競艇をされるんですか？初耳です。」

「あいつ、えらい入れ込んでしもつてな。負けてばかりで金回りに困つとるらしいねん。」

「へえーっ、そうなんですか？お金にねえ……」

智美は、ギャンブルと金が一つの線で繋がる予測が出来た。謎が解明されていくような、モヤモヤがスッキリとしていく爽快さを感じながら、一方ではお金を渡すのをどうしようか？と考えていた。

「ワシらの班の中でも金を借りにこられた奴もある。負けたら金が戻ってこないぞ。」

そんな話を聞いていると、ますます迷ってしまう。が、最初からお金は返してもらつつもりではなかったんだ！私にお金を借りに来た事も、他の人達には伏せておこう。そして競艇に行つてるとこの話は聞いてない事にしておこう！……と智美は自分に言い聞かせて納得していたのだった。

翌日、いきなり朝に金田とロッカーの前で出会った。昨日、自分なりに金田への対応は考えていたものの、朝一番に会う事は想定していなかった。不意をつかれてどう切り出してよいのか言葉が出てこなかった。金田は競艇で負けたのか？どことなく元気がなく、いつも堂々とした威厳のある態度も影を潜めているように思われた。「お、おはようございます。あの……実は昨日お持ちしたんですけど……」

最後まで言わないうちに、金田が話してきた。

「ワシ昨日は腹の調子悪てなあ。医者に診てもらてたんや。前の日に刺身食ったんや。トロもトロ、大トロの舌で溶けるような柔らか

いトロやったわ。今度、智美ちゃんにも食わせてやるわ。せやけど、食い過ぎて夜中に痛うて痛うて我慢出来んかったから、休んでたんだよ。」

態度とは裏腹で調子のいい事を言ってるだけに、どこまで本当なのかはわからなかったが、智美は嘘を言ってる金田を気の毒に思えた。「そうですか。それは大変な目に遭いましたね。もうよろしいのですか？」

「ああ、ワシは24時間働いた事のある男や。トロにあたったくらいではくたばらんわ。」

「あまり無理なならないようにして下さいね。ところで、これは約束していたお金です。」

茶色の封筒を金田に差し出した。

「それでね、私は金田さんに今まで色々と目をかけていただいたたでしょ？これは私からの御礼です。だから、返さないといけない…とかいう気遣いは無用ですから、どうぞ。」

金田は一瞬驚いた顔をしたが、それはすぐに泣き顔に変わった。

「智美ちゃん、ええ子やなあ。ほんまに優しい子や。ワシはこの恩を忘れへんからな。おおきに、おおきに。」

金田は智美の手をとって、両手で何度も握手をしながら智美に礼を言うのだった。背中を丸めて何度も何度も有り難がる金田が小さく見えた。

「いえ、ささやかな金額しか入っていませんので、お気遣いはなさらないように。」

智美は早くその場から立ち去りたかった。昨日お金を渡す事を戸惑った事や、たいした事もしてないのにそんなに恐縮されるのが心苦しかったからだ。

そうこうしている間に、現場で働く梅本が傍を通り過ぎた。智美の手をとって泣いている金田と、困惑顔の智美の方を横目に見ながら、何か言いたそうだったが黙って行ってしまった。仕事が始まってからも智美は金田の事を考えていた。今日も仕事はたんまりとあった。

現場から上がってくる間違いだらけの計算や、ぬけもれだらけの帳票を保存出来る書類に仕上げるのが智美の仕事だ。電卓を慌ただしくたたきながら、どうして金田が競艇にはまってしまったのか？羽振り良かったお金を注ぎ込み、みんなにお金を借りてまで行かせる競艇って何なのだろうか？智美には女に子供が出来たと嘘をついて見栄を張るのは男の意地なのだろうか？と目まぐるしく頭と指先を働かせるのだった。とにかく集中していた。だから隣の席に梅本が座っている事に全く気付かなかった。

「忙しそうやなあ。」

声をかけられて顔を上げる。

「あつ、梅本さん。いつの間に座ってましたんですか？」

梅本は来年に定年を控えた、会社でも年配でおいしいさんのような存在だった。現場で出会うたびにとぼけた事を言っては楽しませてくれていた。天然のような冗談のようなどこかつかみどころがなかったが、智美にはいつもジョースをおごってくれるおじ様の一人だった。挨拶だけでなく、くだらない冗談を言い合っては笑っていたので、智美の中では親しいおじ様だった。「智美ちゃんを驚かしたろ思うてな。息もせんと静かにしとったわ。」

「あらあら、梅本さんったらそんなに急いで棺桶に入りたいのですか？」

「アハハ、棺桶か…もう片足突っ込んでるようなもんやわ。」

「まあ、嫌だ！梅本さんて冗談キツイですね。」

「何言ってるねん！智美ちゃんが棺桶の話題を出したんやがな。」

「そうでした。失礼しました（笑）」

いつもの調子で話しながら笑っていると、梅本が声を低くトーンを下げて聞いてきた。

「ところで、今朝金田と話しとったやろ？なんやら手繫いで仲良さそうにしとったなあ、何を話しとったんや？」

「あつ、あれはですね…」智美はどのように説明したら良いのか悩んだ。お金を渡した事は誰にも話すつもりはなかったし、金田の競

艇遊びの話や 女性のお腹に子供の命が宿った事など、事実確認ができてないので説明するにも時間を要する。咄嗟に出た言葉が、

「昨日休まれた事を聞いてたんですよ。」

だった。我ながらあまり冴えた答えではなかったが、梅本はそれで納得するだろう。と軽く考えていた。ところが意に反して梅本はしつこくくらいついてきたのだ。

「なんで、休んだ事聞いただけで手繋がなあかんのや？お前らあやしいな。」

「はっ？あやしいつてどういう事です？」

「出来てるんやろ？朝から会社でイチヤイチヤとやらしいわ。」

これには智美も呆れてしまって、反論する気にもならなかった。梅本はもともと仕事の評価も芳しくなく、作業をするよりも口を動かしている方が多い。と同じ現場で働いている者はみんな怒っていた。また、どこで作業しているのが全く分からず、仕事で書き漏れがあつて聞きに行こうとしても、大概つかまらない。現場の人に尋ねると、

「さつきは原料を計る作業場にいた。」

と言われ探しに行くと姿はなかった。別の人に聞くと

「印刷室におつたわ。」

と即座にその場所に行ってみる。すると、

「もう、10分くらい前に出て行つたぞ！」

またもや行き違い。といった具合にいつも用事がある度、見つけるのに困難をきたしていた。揚げ句の果てに出会つたのは、食堂にある自販機の前で煙草を吸いながらコーヒーを飲んでいる梅本の姿。

こんなに一つの事を聞きに行くのに振り回される人は梅本くらいである。しかしながら、骸骨のように細い体型と、分かつてるよう理解出来ない頭具合が何故か憎めない、面白いキャラを持っている。そのうえ、気前の良さで現場の人達にもコーヒーやジュースをおこつてやっていたので、仕事をしてない事を怒っている現場の間でさえも、

「梅ちゃんは仕方ないなあ。」

なんて、これ以上求めても無理だと半ば諦めとも取れる考えで納得されていたのだった。

「あやしい事などありませんよ。」

智美は小さい子供に話すようなゆっくりとした口調で話した。

「どういう関係を想像されてるか存じませんが、私だけでなく金田さんにも失礼ですよ。勝手な想像で噂を起てられるのは心外です。梅本さんだって、自分がやってない事に濡れ衣を着せられて言い触らされるのは嫌でしょ？違いますか？」

智美が丁寧に説明するように、しかも堂々と言つてのけたので、梅本はポカンと口をあけて智美の顔を見ていた。言い返すにも言葉が出てこない様子で、座っていた席から居心地が悪そうに立ち上がる

と、

「チエツ！しょうがねえなあ。」

と関東風のイントネーションで、気取った言い方をして部屋を出て行ったのだった。智美は梅本の背中を見送りながら、何故か笑いが込み上げてきた。梅本が仕事をせず人の噂話をあちこちでしているのは有名だったので、それに釘をさせた事が爽快だった。その上、普段とはちがう気取った言い回しが面白かったからだ。二階の事務所から下を見下ろすと、梅本が階段を危なっかしそうに降りて行くところだった。そういえば、以前階段から転げ落ちたので、降りる時は必ず手摺りを持ってゆっくりと足を運ぶようにしている…と言つてたっけ。その事を思い出して、智美は再び込み上げてくる笑いをかみ殺しながら仕事に戻った。

第2話 オーディション

季節は進んで、すっかり寒さの厳しい冬へと突入していた。寒いのは気温だけではなく、会社自身も寒くて凍りついていた。何と云っても人間同士のコミュニケーションを取るのが下手くそで、まるで小さい子供が要求の通らない時みたいに……いい大人が本音を伝えられない不平不満で充満している。それは休憩室の煙草の煙りのようにモヤモヤと渦巻いていた。そして、言葉の使い方のわからない者同士が傷付け合い、あらゆる関係が冷え切っていたのだ。

「また、陰で悪口言い合って……」

智美は呆れてため息をついた。この会社に来てからというものの、ため息の数が増えて困っていた。

「こんなにため息ばかりついてたら、老け込んでしまう。ポジティブにいかなくちゃ！」

今日も自身に言い聞かせて仕事に没頭するのだった。

「智美さん、今日もオーディションがありますよ。」隣の席の静江が小声で教えてくれた。

「えっ！今日あるの？って事は、また誰か辞めた？」「そうなんですよ。現場の伊藤君が、新しい会社就職決まったからって丸山課長に言ってきたそうです。」

「まあ！伊藤君が！？それ、現場の人すつごく困るやん。若い子こんなに辞めていくんじゃ、この会社先行きあやしいね……」

小声で話していたが、ヒソヒソ声が耳障りだったのか、事務所の部長の岩崎が眉間に皺を寄せてこちらを見ていた。慌ててパソコンに目をやり、入力作業の続きをする。……あと何人の若者が辞めていくのだろう？今月に入ってから3人も退職している。残っているのは定年間際の50代後半の人が大半だ。あと2〜3年もすれば、団塊の世代の面々が退職する事になる。若者が辞める原因の一つには、

年寄りばかりで活気がないしつまらない…というのがあった。話題も合うはずがなく、孤立して辞めたくなるのだ。もう一つは女性が少なく、華やかさに欠ける…と言って辞めて行った者もいた。工場でそれを求めるのはお門違いだが、やはり若い男性にとつては、それも会社に来る意欲が無くなる原因なのだ。とにかく若者が定着しない会社は先がないだろう。一度倒産をしているこの会社は、更正会社にもかかわらず、再び悪い二の足を踏もうとしていた。倒産前と違う事と言えば、社長を大きな商社から連れて来て、何の権限も与えずにお飾りしてあるという事だけだ。威厳

もなければ、意見を聞いてくれる人もいない…経営者とは名前ばかりで、その孤独さゆえか常にブツブツと独り言が多かった。だから事務所にいる従業員からかなり疎まれていた。工場長との不仲は、誰がみても一目瞭然で二人の間の溝は大きくて深く、その上に木枯らしまで吹き荒れているといった具合だった。どこを取っても上向きな話は出てこない。智美は、再びため息をつこうとしている自分に気付いて、吸った息を深呼吸するようにゆっくりと吐き出すのだった。

「毎度〜！」

大阪の本社から、面接をするために、大木課長がやって来た。挨拶と言えばいつもこの言葉が出てくる。大木は、面接をする度にわざわざ大阪からこの田舎町に出向いていた。2時間弱かかる時間と特急電車に乗っての工場出社は、無駄が多い…と現場の課長である丸山の非難をかっていた。丸山は自分の部署の若者がどんどん退職していく事への苛立ちを、全て会社のせいにしていた。そのため、丸山は会社では厄介者扱いされていた。確かに丸山の無駄が多いという意見は的を射ていた。本社と言っても、在籍しているのは営業課と管理課の数名だけで、毎日のように誰かは田舎工場に出張してい

たからだ。しかし、それよりも丸山が何も動かない事の方が、現場で働く者達からは不満が洩れていた。もともと営業と事務をしていた丸山にとって、製造課へ飛ばされたのは不甲斐なかったのだろう。しかし、その人事を全て会社の工場長や管理部の部長のせいにしていた。

「会社の事を思つて意見したら、製造にいかされた。あいつら馬鹿だから、何もわかつてない。こんなに若い奴らが残りたくない会社にしたのも、あいつらのせいや。」

丸山はいつも部下達にそう唱えていた。しかし、仕事の相談をしても何の解決の糸口すら見出してくれず、行動を起こさない丸山はただの無能な上司であることは智美にだってわかった。会社を変えようと思えば、改革出来る立場にある課長という役割を活用してくれてない事が残念でならない。

「一回倒産したけど、更正会社の期間が外れたらまた倒産する。」丸山の持論に現場の若い従業員は危機感を覚え、不安を煽りたてられて退職していく...というのがパターン化されている。それで、人員募集を余儀なくされ、最近はおーディションが盛んに行われているのだった。おーディションと言ってもちよつと笑える面接の仕方に、女子従業員から嘲笑されている事を管理部の大木は知る由もなかった。おーディションはそんな馬鹿にした面接を皮肉つた言い回しであり、ジャーニーズのおーディションのようにカッコイイ若者が面接に来て欲しいという女子社員の願いでもあった。しかし、おーディションを受けに来る人と言えば、おおよそバック転などにはほど遠い50歳を過ぎた冴えないおじ様か、どう見ても動かなさそうな太めの若者だった。

「うーん、あれはどう考えても駄目やわ。なんでうちの会社ってカッコイイ若者がおーディションに来ないのかな？」

事務所を訪れるおーディションを受けにくる人員を見て、若い女子社員達はがっかりしていた。明るくてかわいい顔立ちをしている桃子は今日来た若者をばっさり切り捨てていた。何故なら、いきなり

の大木の

「 $100 \div 4$ は？」

の質問に

「20」と自信なさげな小さい声が聞こえてきたからだ。突然の計算問題に面を喰らったのか？はたまた、本当に計算できなかったのか？定かではないが、ちよつと太めのその若者は、その質問以来、大木の見下した面接の餌食となった。

「ところで、見たところ自分は線が太いけど、力はあるん？」

「はい。あると思います。」

「うちは25kgの製品入った袋を持って作業してもらわなあかんけど、持てるん？」

「はい。」

「なんで？」

「…………。」

このやり取りを聞いていた静江と智美は、吹出しそうになる笑いを必死で堪えながら顔を見合わせていた。「『なんで？』と言われても答えようがないですよね！」

もの静かな静江でも、壺にはまったのかクスクスと口に手をあてて笑い出した。全くその通りである。智美も大木の馬鹿げた質問内容に苦笑しながら考えた。何故わざわざ本社から来て、こんな茶番な面接をするのか？どうして面接官が大木でないといけないのか？そもそもため口で面接するのは会社の品格を落としているのではないか？と不思議でならなかった。

本社でいる限り、工場が今どんな状態であるのかは、大木も見えてなかった。いつも丸山と新垣の愚痴から情報を得ていたので、対応が多少ズレていて苛立ちを覚えるのだった。新垣は、事務所にいる課長だった。鼻歌を歌いながら事務所に入ってきたり、頭の素早い回転から出てくるトークはみんなを笑わせてくれていた。ある意味みんなを和ませてくれる存在だ。しかし、隣の席の桃子は新垣のパソコンがつねに何も開いていないデスクトップである事に気付いて

いた。そして、工程表が出された時だけ何をするわけでもなく、それを眺めている…と言うのだ。確かに事務所で仕切っているのは、部長の岩崎だった。しかし、岩崎と折り合いの悪い新垣は、岩崎が席を離すや否や部下達に向かって批判を始めるのだった。

「あいつは暗い。いつも眉間に皺を寄せて、怖い顔してるやろ？なあ、そう思わへんか？あんな顔してるから部下に嫌われるんや！なつ、千佳ちゃん。」

「えっ！ああ…まあ…。」女子社員も返答に困った。だから、いつもみんな笑ってごまかすか、曖昧な返事で濁していたのだった。すると決まって新垣は、

「千佳ちゃん、岩崎が怖い顔してるなんて、ようそんな失礼な事言うなあ。女の子はキツイわ。」

と自分で振っておいたネタで、女の子の反応を見ているのだった。年齢がいつてる智美ならすぐに、

「言うてない、言うてない。それは新垣さんが言ったんでしょ？」と切り返すのだが、まだ若い千佳は引き攣った笑顔で

「アハハ…」

と笑うのが関の山だった。

確かに、事務所の中に岩崎がいるだけで静かにしないと睨まれるため、ある種の緊張感があった。岩崎が現場を見に行くために席を外すと、新垣が酸素不足の金魚が水面に顔を擡げて口をパクパクするように、喋り出すのだった。息が詰まりそうなほど静かな事務所に、新垣のお喋りはかなり気分転換になったので、智美はこのトークが嫌ではなかった。パソコンへの単純な入力。更正会社であるので得意先からの電話もほとんどない。かかってきた！と思えば営業部の植木が眠そうな声で、

「毎度、あれ？誰にかけたんやっただけ？」

とズッコケた事を言うので調子が狂うくらいのもだった。お客さまも滅多にこない。だから、事務所と言えども活気がなく常に静寂を保っていた。それだけに社長の独り言が事務所中に洩れ聞こえる

のだった。普通の会社であれば、社長室などいうものがあって、秘書などつけてももらえるのであろう。倒産した時、智美はまだこの会社で働いていなかった。しかし、倒産前の先代の社長は、今の大阪事務所にやたら女子社員を採用していた…という。そんなに人数も必要としないにも関わらず、自分好みのお水系の派手なお姉ちゃんが所狭しといたらしい。赤く塗った長い爪は、文字を書かせても解読不明、パソコン入力を依頼すると、

「爪が割れるから無理！」と言って髪の毛を赤い爪に巻きつけていた。その時まだ営業にいた丸山は、

「あれは酷かった。あんな計画性ない事してるから倒産したんや。」
と言っていた。結局、その二代目だった坊ちゃん社長は失脚して、会社更正法が適用されると同時に大手商社から連れて来られたのが今の社長だった。しかし、国際電話などにも流暢に応える語学力を持つこの社長に、息苦しい空気の工場現場など合うはずもなかった。現場の者は、

「社長の姿現場で、見た事ないわ。」

というくらい事務所に張り付いていた。社長室がないため、社長の言動は事務所の社員に筒抜けのようによく見えた。新聞を読んでいるか、パソコンを見ているのが一日の主な仕事だ。どう見ても忙しそうには見えなかった。社長とはそういうものかも知れない…と智美にもわかっていたが、たまには現場の人達に、

「ご苦労さまだね。」

と一声かけてあげたら、みんなもモチベーションが上がるのに…と残念に思っていた。

雪の舞う寒い日の午後。いつもにも増して体が動かなかった。寒さで体が固まってしまっている。その上、会議でもあって事務所に偉い方々が一斉にいないなる事もなく、事務所は相変わらずの静

寂を保ちながら、何の代わり映えもしない業務に向かっているだけだった。新垣は退屈そうに欠伸をしながら鳴った電話に、

「俺が取る、俺が取る！」と叫び、いの一番に受話器へと手を伸ばすのだった。「おう、毎度ー！どうや？そっちは雪降ってるか？俺の家の前は雪だらけやから、今日はスキー板履いて滑ってきたぞ。」

お得意のジョークに智美は微笑んだ。少しは静寂が崩される事に安堵感を抱く事が出来た。新垣の仕事は誰が見ても余裕があった。だから、電話で仕事の話をするまでに10分は世間話や自分のジョークを演説するのだった。その上頭の回転の早さを生かして、トークには必ずオチがあつた。一人漫才でもやっているような話術には智美はいつも感心させられる。だから新垣の周りはつねに笑いで溢れていた。仕事をあまりしていない事は誰しもわかっていたが、それを変えさせようとする者はいない。ここだけは、時間がゆっくり流れているようだった。智美は現場で働いている人達の事を想った。

「事務所は部屋も暖かくて、冗談言つても何も注意されないけど、現場はどれほど寒いだろう？しかも空気も悪いから、大変だろうな……あの環境で、生産量を上げる！と言われてもこんなお気楽な姿見たら、やる気も失せるだろうな。」

新垣のトークを左方向から聞きながら、ぼんやりと入力作業をしていた。するといつもの口調で、

「毎度ー。」

と大木が入ってきた。

「こっちは寒いなあー。」大木が来るという事は、オーディションがある事を示唆していた。

「大木さん、今日も面接ですか？」

静江の質問に、大木は少し不機嫌になった。

「この前面接した子を採用しようと思つて手続きしてんけど、直前になって辞退されて……せやからまた1からやり直しですわ。」

こんな会話も珍しくはない。何もこれが初めてではなかったからだ。わざわざ大阪からオーディションのためだけに来たのに、それ自体

をキャンセルされた事もある。約束の時間になっても現れない面接
予定者に待ちぼうけをくわされて、何もせずに大阪に戻って行った
事もあった。作業服に名前の刺繍を入れて用意したにも関わらず、
辞退された事もあったけ……そう言えば、採用して3時間でヘルメ
ットを投げつけて辞めた者もいたなあ。仕事とは言え、大木も懲り
ずによく来るもんだとみんな呆れていた。何故そんな事が何度も繰
り返されるのか？元の原因を追求していない限り改善される余地は
ない。その原因が、智美はなんとなく分かるような気がした。事務
所の中の気楽な様子、大阪事務所の無駄な存在、不満を解消してあ
げられる能力のない上司達……それらが全て悪い方向に働いて、モノ
作りをしている現場作業員のモチベーションを下げているのは、製
品のクレームの多さでもわかる事だ。「辞めるばかりで入ってこな
いんじゃ、マジでヤバくないですか？」

静江が小声で聞いてきた。「更正会社の間は大丈夫やと思うよ。で
も、借金返済した後はどうかな？って言うか、このままじゃ作る人
がいなくなっちゃうよね。」

智美にとっても、会社の倒産は好ましいものではなかった。この年
齢で正社員として採用してくれる企業がない事くらい、智美自身痛
いほど分かっていた。仕事は単純過ぎて面白くなかったが、一応事
務職なので体力は使わなくてすむ。今は大学を卒業したばかりの若
い女性だって採ってほもらえない。女子従業員は人材派遣で賄う企
業が大半を占めている。そんな中この会社は、正社員としてたいし
た能力を求められる事もない。気遣いしない状態で、雇って貰えて
いる事だけでも有り難かった。だから、2回目の倒産は避けてもら
いたい……というのが本音である。でも、どれほど悪い噂がたってい
るのか、不安だった。若い従業員の友達の間では、

「あの会社はやめておいた方がいい。やり甲斐ないし、しんどい仕
事のわりに給料は安い！」

と広まっていると言う。それは、入社しても辞めて行った若い社員
達がどれほど多いか……という事を物語っていた。そういう者達から

の噂がネズミ講のように広がり、今やその噂を封じ込める事など不可能なのだから。

智美があれこれ考えていると、事務所にオーディションを受けに来たらしい若者が立っていた。

「こ、こんにちは。2時から面接の約束だったのですが、大木課長はいらっしゃいますか？」

総務の静江が素早く立ち上がり、事務所にある仕切りの中にある椅子に案内した。仕切つてあるだけなので、話してる内容が全て聞こえる。その大木の質問にはみんな笑っていた。企業の面接で聞く質問ではなかった。何故なら人権にさしさわるような家族の事を事細かく聞いたり、卒業している学校のレベルを必要以上にこだわっていたからだ。この前は、

「家に風呂あるん？」

と聞いていたので、千佳と桃子から猛烈に批判されていた。ただ、大学を卒業していない大木は、高学歴者には相当コンプレックスを持っていうようだった。だから、大卒の者には決してそのような失礼な質問をする事はないのだ。しかし、その差別こそがみんなから不信に思われている事を大木はわかってなかった。失礼な面接に拍車をかけているのが、余計に良い人材が入ってこない理由にもなっていた。今回のオーディションも何か笑える質問が飛び出しそうな事は、智美にも予測出来た。なにしろ、見ただけでも、青白い顔をして華奢な体型は、間違いなくあの質問をされる事は事務所にいる者なら誰にでもわかるだろう。

オーディションが始まるや否や、大木の口から

「自分、線細いなあ。体重何kgあるん？」

この質問に静江は智美と目を合わせ、またか…と呆れた顔をしていた。千佳と桃子も智美の方を見て、

「ほら、やっぱりね。」

と笑いを堪えていたので、軽く頷いた。聞き耳を立てて、更にオーディションの様子に集中した。面接に来たか細い子は、消え入るよ

うな小さな声で、

「36Kgです…。」

と申し訳なさそうに答えた。すかさず大木は、

「うちの製品は一袋25Kg入りやけど自分の体重とあんまり変わらへんなあ。そんなんでもってん？」

その声には明らかに見下した様子が伺えた。

「あつ…はい。おそらく。」

と自信なさげに答えると、大木は笑い出しながら、

「おそらく…って自分、そんないい加減な事言うてもろたら困るわ。今から現場に行くから、持ってもらわ。ヘルメット被ってや。」

そう言つと、面接に来た子を引き連れて、現場へと消えて行った。

「どうやら、オーディション場所を現場に変えたみたいやね。」

智美が静江に言つと、

「大木さんって人を見下して本当に嫌な人ですね。」と綺麗な顔をしかめながら言った。

「その通り。あれでは悪い噂が立つても仕方ないわ。」

智美は、やる気のない暗い気分をより闇の中に突き落とされたような気持ちで入力作業を続けた。

それから数日経つて、前にオーディションを受けた細い身体の若者が入社してきた。線が太かろうが細かろうが、来る者を拒まないのがこの会社のオーディションだ。人をより好みしている場合ではなかった。何しろ入社してもすぐに辞めてしまつて、大木は再びオーディションに来ないといけない羽目になるのだから。正直、智美もあの華奢な若者が長続きするのは難しいだろうなと思った。現場の作業はかなり重労働だったし、環境の悪さから臭いに耐えられない人も多かった。智美よりもはるかに軽い体重の彼が、そんな過酷な

労働に耐えるのは、新垣に

「一時間黙っている」と言うのと同じくらい困難な事だろう。

「作業服のズボン、73cmでも大きいんですって。」

静江は新しい作業衣を準備をしながら、そう話してくれた。

現場に行くと、真新しい作業衣にどこか大きく感じられる若者が、25kgの袋を重そうに運んでいた。袖口から見えている細い手首は、木の枝のようだった。智美は、その姿を見ていて手伝ってあげたい衝動にかられた。歩きながら見ていると、小枝君の方から

「こんにちは。」

と会釈しながら挨拶をしてきた。現場の人が挨拶してくるのに慣れていない智美は、少々驚いた。が、すぐに、

「こんにちは。慣れないから重くて大変じゃない？」と声をかけた。

「いえ。大丈夫です。」

「そう。あまり最初から飛ばしすぎると疲れるから、無理しないようにね。」

智美の言葉に小枝君は、

「はい。ありがとうございます。」

と再び深々と頭を下げた。なんだか、久しぶりに普通のコミュニケーションが取れて、とても新鮮な印象を受けた。彼もそのうち会社の空気に汚染されるように、このフレッシュさも失われていくのだろうな。と考えながら智美は手を挙げて、その場を立ち去った。休憩室は相変わらずの満員御礼だった。今日も煙草の煙が渦巻いている。書類を置いて立ち去る時に、ふと目に止まったものがあつた。有給休暇の届けが山のように出ていた。日付を見ると2月11日ばかりだった。祭日が出勤のせいもあって、旗日には必ず誰かは休むというのは常だった。しかし、これだけの人数が休むとなると、半分の人数で現場を動かさなければならぬことになる。機械を停めずに納期に間に合う生産をする事が出来るのだろうか？智美は、丸山の愚痴を言っしやがれた声が聞こえるような気がした。

しばらく平穏な日が続いていたが、品質保証課の若者が退職を希望してきた。今や辞めるのは製造現場だけではなかった。各部署の若者が先をこぞって退職を希望していく。その事が何を意味しているのかを上層部はわかっているのだろうか？今の状態は、会社の人口ピラミッドに例えるとカクテルグラス型だった。20代、30代が1番上の定年間際の人達を細々と支えている。しかし、その支えの部分がどんどん減っていった、風前の燭となっていた。若者が辞めるのを受けて、早速人員募集の広告が出された。この会社は年中募集の広告が掲載されていたので、その事が逆に敬遠されていた。今回は品質保証課という事もあって、

『幹部候補生募集！』と大々的に宣伝していた。それがまた、今働いている従業員の反感を買うはめになり、モチベーションは下がる一方だった。そして直ぐさま生産量に反映された。休憩室は益々満員で、現場の機械には人がいなくなった。そんな事をしているも注意する上司は不在なのだ。なぜなら、それは全て会社のせいだと決めつけていたのだから。

「毎度」

いつもの挨拶で大木がやって来た。今回は『幹部候補生』の文字に躍らされて、珍しくオーディション希望者が募ってきたのだ。しかも二人もだ。大木は張り切ったか、オーディションを始めるまでに事務所の中をうろつくと歩き回っていた。別に用事や仕事があるわけでもないのに、ただあっちへ行ったりこっちに来たりと忙しそうに歩いていた。千佳と桃子はそれが気になって仕方ないらしく、疎ましそうな顔で仕事をしていた。智美が気付いている事を静江も気付いているようで、智美の方に大きな瞳をより一層見開いて見せた。

一人目がやって来た。ちよつとメタボな中年親父だった。履歴書を見た大木からの質問攻めが聞こえてきた。

「48歳ということですが、結婚はされてますか？」

流石に自分よりは年上という事もあって、丁寧な言い方で始まった。

「していたのですが、今は独り身です。」

「ふうん。そうですか。子供は？」

「息子が一人います。」

「何年前に離婚されましたか？」

「はあ、5年くらいになりますかねえ。」

「家事は全部一人でされてますの？会社に来る前に家事しては、しんどいんと違いますか？」

これだけ聞いただけでも、智美の不快指数は上昇していた。しかし、失礼な質問はこれで終わらなかつた。「職歴見せてもらつただけでも、えらい転々としてるようですが……えー、この会社はなんで辞めたん？」

中年の親父は聞かれた事に真面目に答えていた。

「その前に働いていたこの会社、これは何してる会社？従業員は何人くらいいたん？」

大木の口調がだんだんため口になっていく。職歴の辞めた理由とどんな会社で何をしていたかを一通り聞くだけで一時間近くになるうとしていた。揚げ句の果てには、

「今回うちは幹部になっていただけの人を募集してますので、あなたのように色々仕事変わられてたら、長続きしないでしょう。パソコンも出来ないという事ですので、うちではちよつと難しいんと違うかなあ。」

と珍しく断っていた。きつと後にも面接に来るので大きく出たに違いない。根掘り葉掘り聞かれて断られた親父の背中を見送りながら、とても気の毒な思いで溢れてきた。

しばらくしてから、二人目のオーディション希望者が受けに来た。歳は二十歳過ぎの若者だ。金髪にピアスを開けていてどことなく態

度がふてぶてしかった。

「こんにちは」

見た目とはうらはらに、きちんとした挨拶をしてきたその若者に対して大木は、いきなり

「ハアッ」

と溜息をついた。これには智美も想定外だったので、もしかしたら、大木は若者に殴られるのではないかと心配した。履歴書を見た大木は再び、溜息をついた。どういう事だろう？事務所の誰もが、どんな質問をされるのか聞き耳を立てた。「自分、高校中退してるんやなあ」。っていう事は中卒という事やな。」

この時、智美は大木の口の横のホクロが歪んだのが見えるようだった。

「うちは仕上がり数量を数えてもらわなあかんねんけど、計算出来るん？」

第3話 セクシャルハラスメント

今年もまたホワイトデーがやってきた。毎年そうだが、この日は女子従業員にとつては最高に幸せな日でもあった。義理チョコを申し訳程度に配っただけで、たくさんのお返しが待っていたからだ。智美もホワイトデーは一年の内で、最もプレゼントをもらえる日なので大好きだった。

「誕生日でもクリスマスでもこんなにプレゼントはもらえへんわ。」いつも女の子の間では、そんな会話をしていた。今年の社長からのお返しは何だろう？美味しいお菓子はあるかな？なんていう楽しみと期待で、この日だけは仕事で上がらないテンションをアゲアゲで出社するのだった。朝現場へと向かうと、

「智美ちゃん、この前はおおきに。これお返しや。」と言って美味しいそうなお菓子の包みが差し出される。「わあゝ。ありがとうございます。」

智美は朝から幸せいっぱい気分浸っていた。ホワイトデーの後しばらくの間お菓子を買わなくても良かったので、とても助かった。しかも、みんなは美味しい物や珍しい物を贈ってくれた。インターネットでわざわざ取り寄せてくれた物もあった。高級な香水やマグカップもあった。また、洒落か悪戯か下着をくれる人もいた。

「ねえ、ねえゝ上野さんからお返しはパンティやったよ！しかもレースのスケスケでちよつと恥ずかしいねんけど。」

「えっ！智美さんのそんなセクシーのだったんですか？私のはくまさんと風船でしたよ。かわいかったんですけどね。やっぱり大人の女性と区別されたのかな？」

二十歳過ぎの淑子がそんな事を言うので、お昼休みの食堂ではホワイトデーのお返しの話で盛り上がっていた。工場長からのお菓子は美味しかったとか、松村さんは去年お返しを忘れていて、ホワイトデーの次の日に、慌てて買って持って来たとか、幸せな一時をキャ

ツキヤツ言いながら話していた。

午後からは、眠い体に鞭打って稼働率の計算をしていた。今日は昼一番から会議があつたので、課長も次長も全てお偉い方々は会議室の中だった。智美は気楽な気分で一人、製造現場の事務所で仕事をしていた。欠伸や肩の運動をして気分転換をしていると、梅本が部屋に入ってきた。

「ああ、梅本さん。今日は課長いらっしやらないですよ。みんな会議ですから。」

智美の言葉に梅本は、

「せやから来たんや。智美ちゃんと二人つきりになる思つてな。チャンスやなあ。」

「ハハハ…梅本さん何がチャンスなんですか？社交辞令にしても可笑し過ぎるじゃないですか。」

智美は、眠気を飛ばすように笑った。上司がいない事もあって少し気が緩んでいたせいか、誰に遠慮もなく大声で笑っていた。すると梅本は、

「自分、かわいらしい顔してるなあ。ワシ、智美ちゃんみたいな子好みやねん。」

と少し真面目な顔で言ってきたので、

「またまた冗談言つて〜！からかわないで下さいよ。この会社には若くてかわいらしい子がいっぱいいるじゃないですか！しかも、梅本さんは私の父と歳も変わらないでしょ？」

「ほんまの事やで。若いとか関係なく、ワシは智美ちゃんが1番やねん。」

「それはどうも。そんな事言つて下さるのは梅本さんだけです。でも、褒めてもらつても何も出ませんけどね。」

智美は、冗談っぽく言った。すると梅本は、声を潜めて智美に顔を近づけながら聞いてきた。

「今日の昼休み、女の子で話しとったやろ？上野から何もろたんや？」

智美はギョツとした。昼休み騒いでいた話を梅本は聞いていたのだ。
「あーっ、あれね。ホワイトデーに重宝な物にもらった…って話してただけです。」

「パンティはそんな重宝な物か？」

梅本が、内容までしつかりと聞いていたのには驚いた。しかも顔を近づけながら言ってきたので、智美は少し気持ち悪さを感じた。しかし、ここで恥ずかしがるのは梅本の思う壺になるのではないかと考え、毅然とした態度で答えた。

「そりゃあそうでしょう！パンティはかない人はいないでしょ？何を頂くにしても、贈ってくれる人の気持ちは大切にしないと…」

「どんなパンティや？」

智美の言葉を遮るように梅本が聞いてきた。

「なんでも、透けてるそうやないか。」

「そこまでご存じならば、私に敢えて聞く必要ないでしょ？」

「そのパンティ、はいてみたんか？なあ、どうやった？」

「答える義務はありません。」

ここまで言われると、智美はかなり不愉快になってきた。ただ、大声で叱るのも大人げない気がしたので、無視する事に決めた。

「会社へはいて来てくれへんか？」

「……。」

「はいてきたら、スカート幕って見せてくれたらええわ。」

「……。」

「ワシ、気になって寝られへんよってに、はいて来たら見せてや。」

「……。」

「なあ、ええなあ？」

このあたりで智美の憤りは、最高潮に達した。無視してるのは嫌がつているという事を梅本はわかっていない。自分の都合のいいように解釈してるのには、呆れ果てた。怖い顔をしながら智美は梅本の顔を見ずに、ぶっきらぼうに口をきいた。

「あのね、さっきから言いたいように言ってくれますけど、私は

梅本さんにパンティを見せるつもりは毛頭ありません。気になって寝られないのはそっちの勝手ですから、今度は棺桶に両足突っ込んだらいかがですか？」

不快な気持ちをここぞとばかりに表したつもりだった。少々失礼な事を言ったかな？とためらわれたが、梅本はこれくらい言わないと気付いてくれないだろうと考えた。

「自分は棺桶が好きやなあ。両足突っ込んだら出られへんやないか。出る時に、ワシの手を引いてくれるか？」

「あ。棺桶ではなくて、私は梅本さんにパンティを見せるのが嫌だと言ってるんです！」

「嫌だ嫌だも好きのうち……って言うやろ？ほんまは喜んでるくせに。」

よくもまあーこんなにポジティブに考えられるもんだと、智美は呆れて言葉を返すのも疲れてきた。

「違います。」

「それやったら、上野にもろたパンティをくれ。」

「はっ？そんな事は出来ません。だいたい贈ってくれた上野さんに失礼でしょ？」

「ワシが、代わりのパンティ買ってやるやないか。」

「結構です。早く仕事に戻って下さい。」

「自分、喜んでるくせに……。そんねん早う帰さんでもええやろ？なあ。」

梅本が一段と近付いてきたので、智美は流石にその場にいるのが怖くなり、思わず立ち上がった。そこへ現場を手伝う斉木が、事務所へ上がってきた。

「梅ちゃん、何処へ行ったかと思ったら、こんな所でさぼって。」

「斉木君、気がきかへんなあ。ワシと智美ちゃんのデートを邪魔せんといてくれるか！」

智美は斉木に向かって大きく頭を振った。

「梅ちゃん、何眠たい事言うてるねん。選別がようけあって困って

るねん。さあ、行くで。」

背が高くて体格の良い斉木は、座っていた梅本を強引に連れて行ってくれた。

「ありがとう。」

智美は声を出さずに口を動かして、斉木に頭を下げた。

それからしばらくは、梅本から何も言っていなかった。あれは単なる冗談だったのだ。と智美は思った。昼休みに女の子達がパンティがどうだこうだと言っているのを聞いて、その時だけ興味が湧いたのだろう。だいたい定年前のおじいさんが、そこまでパンティに固執するのは考え難かった。確かに現在梅本は離婚をしていて独身だった。しかし、梅本の子供は独立をして世帯も持っていると言われている。そして孫の写真を大切そうに財布に入れていた。智美も何度か見せてもらった事があるので、孫の成長に目を細める優しい祖父なのだと思っていたからだ。しかし、梅本のあの顔が近付いてきた時の雰囲気と漂ってきた口臭は、思い出しただけでも背筋が寒くなるのは否めなかった。智美がいつも通りに現場へ仕上り表を配りに行くのと、梅本が数人の現場作業員と休憩していた。みんなで話をしていたのでそのまま置いて、素早く出て行こうと足を早めた。すると、「智美ちゃん！ちよつと待ってや。」

と呼び止められた。声の主は梅本だった。

「ちよつと頼みがあるんや。」

一瞬、この前と同じ依頼がされるのでは！？と警戒したが、他にも人がいるので心配には及ばないだろうと思った。

「なんでしよう？」

少しぶつきらばうに聞いてみた。

「来週、息子の嫁が誕生日なんや。化粧品とか入れるやつ…あれ、何て言うんやったかな？」

「化粧ポーチですか？」

「ああ、それぞれ！その化粧ポーチとか言うのを買いに行こうと思うんやけど、ワシようわからんよって一緒に買いに来てくれへんか？」

智美の脳裏にこの前の近付いてきた顔と臭いが蘇った。絶対無理！と心の中で叫んでいた。二人で買い物なんて、その姿を想像しただけでも気持ちは暗く闇の底まで墜ちていきそうだ。

「あのお…。二人で行くのはちょっと困ります。私も仕事が終わってから買い物や家の用事もあって忙しいですから。」

「ワシ、なんぼでも仕事早う終わるよってに、都合のええ日を言うてくれ。」

やはり、梅本は断っている事に気付いていない。智美は少し考えた。犬井ヒロシのように…

嫌なエロオヤジに、After Fiveを無理矢理誘われた時の話やけど、その断り方として二通りあると思うねん。まずは後仕事のしやすさを考慮して

「ゴメンなさい。私んち、夜間外出禁止だからデートできないのお」

とカマトトぶって申し訳なさそうに断るのか？それとも

「何ぬかしてるねん！気持ち悪い。一生お願いされても、デートは有り得へんわ！…！」

とドスをきかせて二度と言い出せないくらいにビビらせて断るかは…自由だああ~~~~！！After Five is Freedom このネタが、フォークギターのメロディと一緒に頭を駆け巡っていた。気持ち的には後者であった。しかし、まだ定年までは一緒に会社で仕事をしなければならぬ。ドスをきかせてビビらせるのは梅本のみならず、他の現場の人達とも仕事をやりにくくする恐れがあった。だからと言って、智美はぶりっ子する年齢をとうに過ぎていたし、キヤラ的にも相当な無理があった。どうしよう？どうしよう？…返事に迷っていると、梅本が再び

「なあゝいつにしよう?」と言ってきた。

「私、これから先、ずーっと先約があつて…凄く忙しいんです。予定が空くのはですね…」

智美は携帯電話を取り出し、スケジュールをチェックするふりをした。携帯をいじりながらも断るよい手段を模索していた。

「ああ、ここ三年は一日もあいてないですねえ。三年も経つと梅本さん、会社におられないのでは?」

「はっはあゝん。上手い言い方しよるな。携帯見せてみい。」

そう言つて、智美の手から乱暴に携帯を取り上げようと手をのばしてきた。が、智美の反応の方が早かったので、さつと携帯を頭の上に向けて、

「個人情報がたくさんつまってますから、お見せする事はできません。」

と背伸びをした。

「見せてみい。ちよつと、こつちへ。」

まだ梅本が手を伸ばしてきた。その恰好が骸骨が操り人形のように手をぶらんぶらんさせてる様子に似ていたので、智美は急に可笑しくなつて笑い出した。すると、他に休憩していた現場の人達も煙草の煙りを揺らせて大笑いしていた。

「ハハハ…梅ちゃんそのへんでやめとき。嫌がられてるやないか。そんな必死になつてゐる恰好見てたら面白ろ過ぎるわ。」

「そうや。そうや。もつと仕事に必死になつてやらなあかんわ。選別今日もようけきたで。」

そう言われた梅本は、今している動作を止めて、

「よおつ?」

と言つた。

「また、選別きたんかいな。お前ら、色々と余計な物入れた製品作るよつてにワシ忙しいやないか。」

と言いながら、再びよつこらしよと椅子に座つて煙草に火をつけた。その様子を見ていて、休憩室の中は大爆笑に包まれた。どうやら智

美の事は回線が切れたようだ。こういう性格が、みんなを

「梅ちゃんはやあないなあ」

という気持ちにさせる。智美は、得な人だなあと感心するのと、なんとか忘れてくれた安心感からクスツと笑って休憩室を出て行った。次の日、智美の姿を見かけた梅本が、どこからともなく走って来た。

「智美ちゃん歩くの早いなあ。ワシ、必死で走ったよってに心臓止まるかと思っただわ。」

智美は、軽く笑っていたが、昨日の事を思い出したのではないか？という不安に陥っていた。

「あれ何やったかな？け、け、化粧入れる物や。」

「やっぱりきたっ！」

「化粧ポーチでしょ？」

「せや、それや。昨日頼んだ事何とかならんか？智美ちゃんの分も買わせてもらうさかいに、一緒に来てくれへんか？」

「……………」

「なあ、頼むわ。お願いやから頼むわ。」

老人が命ごいをするような憐れみを、全面的に押し出しながら梅本は手を合わせて頼んできた。その姿を見ていて、智美は無下に断るのは気の毒に思えてきた。しかし、二人で会社を終わってから買い物に行くというのは絶対に避けたかった。そうだ！一人で行けばいい。

「梅本さん。もし良ければその化粧ポーチ、私に任せていただけませんか？私、会社が終わってから買い物に行くついでに見繕って購入してきますから。」

「よおっ？」

梅本はポカンと口を開けていた。どうやら智美の申し出の意味が理解出来てないらしい。

「だから、私が一人で化粧ポーチを見つけて買ってきますから、任せて下さい……って事ですよ。」

「ワシも一緒に行くわ。」「いいえ、梅本さんは選別がたくさんあって、当分の間は定時で帰れないでしょ？だから、私が買ってきてますから。」

「せや、ワシ忙しいんやったわ。」

「じゃあ、決まりですね！行けたら今日でも買い物に行きますので、また連絡しますね。」

早々に進めなければ、梅本の気持ちが変わるのではないかと焦ったので、智美は口早に話した。

「そしたら頼むわ。」

あれこれ考えて悩んでいたわりには、以外とあっさり言われたので智美は拍子抜けしたが、二人で行かなくても良い事にはホッとした。「ワシ、仕事してるよってに、どんなん買ったかここへ連絡してくれ。」

「わかりました。私のセンスと趣味の良さで義理の娘さんに飛び切り良い化粧ポーチを探してきますからね。」

智美は我ながら上手い具合に事が進んだな…と安堵の気持ちで歩いていた。この後に起こる、更なる災難など全く予想する事もなく…

智美は、一人で買い物をするために、必死で定時に上げられるよう仕事を捗らせた。万が一残業にでもなつて梅本から、

「ワシも終わつたから一緒に行こう…」

などと言わないようにするために、電卓をたたく指と書類を運ぶ足を早めた。その甲斐あつて、見事に定時で仕事が終わった。

「よし！買い物に行きますか。」

智美は梅本から預かった一万円札と、買い終わったら連絡する為の電話番号を持って店屋へと急いだ。

店と言っても、田舎町にはスーパーか名前ばかりの百貨店くらいし

かない。あまり品数がなく狭い百貨店に智美は寄る事にした。スーパ―よりはプレゼント用の包装がしっかりしているからだ。婦人装飾の売り場には何点かの化粧ポーチが並んでいた。百貨店業界では二流のこの店でも、置いてある商品は名前の知れたブランド品だった。ポーチにはレースのフリルと程よいビーズであしらった可愛い物があつた。

「そう言えば、梅本さんの息子さんのお嫁さんは、かなり若いって言つてたなあ。色はピンクがいいかな？白いのも可愛いなあ」

智美は、楽しみながら選んだ。人の物でも、もらった時の喜んだ顔を想像しただけでもウキウキしてくる。智美は、ピンクのポーチを選んで精算を済ませた。

「あつ！そうだ。梅本さんに連絡を入れる約束だった。」

梅本から渡された携帯電話の番号にかけてみる。

「もしもし。」

梅本の気取つた声が聞こえた。いつもと違う言い方に思わず吹き出しそうになった。

「梅本さん！智美です。まだ、お仕事ですか？」

「おお！智美ちゃんか。今忙しいいてな、休憩室で一服してるとこや。」

「ハハハ…忙しいなら一服出来ないじゃないですか。」

「バレたか？もう、丸ちゃんも帰つていやへんよつてにな、みんなで休憩してるんや。」

「えつ！もう課長いらつしやらないんですか？そうなんですか…」

「あつ、そうそう！化粧ポーチ買いましたよ。」

「おう、すまんのぉ。ええ物あつたか？」

「はい。可愛いポーチを選びましたよ。息子さんの奥さん、多分喜んでくれると思います。」

「それは、おおきに。それで、自分の分も買つたんか？」

「いえ、やっぱり申し訳ないので、お嫁さんの分だけ買いました。」

「遠慮せんでええねん！ワシが智美ちゃんに無理言うて行つてもら

ってるんや。お金も多い目に渡してあるやろ？」

「でも……」

「足らんかったら出しておいとくれ。ワシ、明日払うてもろた分渡すよつてに。」

「いえ、充分いただいてるので足りない事はないんですけど……本当に良いのですか？」

「当たり前前のクラッカーや！遠慮せんと買いや。明日また、どんな物買ったか見せてくれたらええわ。」「ありがとうございます！では、お言葉に甘えて買わせていただきますね。明日持つていきますので、お楽しみに！」

「おう。必ず見せてや。」「了解です。」

電話の向こう側から、騒がしい笑い声が漏れ聞こえてきた。おそらく課長や管理職が全員帰ってしまつて、現場には誰もいない状態なのだろう。みんなが羽を伸ばして休憩している姿が見えるようだった。しかし、智美はそんな事よりも、思いの他可愛い化粧ポーチをゲット出来た事で浮かれていた。梅本の気前良さには脱帽する。こういう性格だから、仕事をしなくても、嫌われる事なくやっていけるのかな？と思った。とにかく有り難い棚から牡丹餅に「よっしや！ラッキー」と小さくガッツポーズをして、再び婦人装飾品売り場へと戻るのだった。

明くる日、智美は余つたお釣りと化粧ポーチを持って梅本のところへ行つた。朝一番から梅本は仕事をせずに椅子に座つて煙草をふかしていた。

「梅本さん、昨日はありがとうございました。これ、お釣りをお返ししておきますね。それと、お嫁さんへのプレゼントです。」

「気にいったのあつたか？」

「ええ、早速使つてます。見て下さい。」

智美は昨日買ってきた物を差し出した。年齢を考慮して落ち着いた黒色、でもビーズをあしらってあるのでどこかゴージャスなポーチだった。

「これが化粧ポーチか。中に何入れるんや？」

「化粧品ですよ。ファンデーションとかリップとか。私はコンタクトレンズのケア用品も入れてますけどね。」

「はっはあゝん。」

口をポカンと開けながら言ったので智美は面白くなって、

「梅本さん、ファンデーションってご存じなんですか？」

と聞いてみた。

「よっ！？」

「ほら、やっぱりわかってない。カタカナになるとわからないんでしたよね？」智美は笑いながら続けた。「まあ、女性の七つ道具が入ってるって事ですよ。」「見せてみい。」

と手を伸ばしてきたので、「ダメですよ。何と言っても秘密がいっぱい詰まってますから、そう簡単にはお見せ出来ません。」

「そんねん秘密がいっぱいなんか？」

「ええ、それはそれはとても男性にはお見せ出来ません。」

「自分、上手い事言うなあゝ。」

二人で、思い切り笑った。「本当にありがとうございます。私の分まで買っていたいて…とても気にいってます。」

「それは良かったわ。ワシな、智美ちゃんが喜んでる顔見るの、好きやねん。ほんまに自分は嬉しそうな顔するなあ。」

「だって本当に嬉しいですもの。きつとお嫁さんも喜んでくれますよ。」

「せやるか？週末大阪に帰るよつてに、息子の嫁さんに渡しておくわ。」

「はい。是非感想を聞いておいて下さい。私も見立てた手前、気になりますからね。」

「よっしや。任さんかい。」

梅本の『任さんかい』ほどあてにならず、任せられないものはない。それが、「梅ちゃんは、しゃあないなあ」
と言われる所以だ。製品の仕上がりが、いつも計算出来なくて、智美のところへ「これ、なんぼになるんや。足してくれ。」
と来る梅本。

「世話のかかるおじさんだなあ。」

と思いつつも、気前のいい梅本はどこか憎めないところがあった。
この間は、こそつと事務所のドアを半分だけ開けて、智美が気付くと手招きして呼び出した。席を立てて梅本の方に行くと、いきなり目薬を手渡された。

「何ですか？これ…」

と不思議がる智美に、梅本は近くにあったソファーに横たわり、上向きに寝そべると目をパツチリ開けながら、

「目薬注してくれ。」

と言うのだった。智美は驚いた後ですぐに呆れてしまった。よくも厚かましい申し出をいとも当たり前のように言えたものだ。

「あのね、ここは学校の保健室ではないんです。だいたい目薬なんて、自分で注した方が加減がわかっていいじゃないですか！」

「あかん、あかん。ワシ自分で注すの怖いねん。ちよつと悪いけど注してくれるか？」

智美は溜息をつきたい気分を必死に抑えるのだった。

「駄々をこねる子供みたいですね。」

智美はあらためて梅本を見た。上向きに寝そべって、目だけをパツチリ開いたままの状態で静止している姿は、それだけでも充分滑稽だった。

「早う。目が乾燥してくるやないか！早う注してくれ。」

智美は急に可笑しくなって笑いが込み上げてきた。でも、至って真面目な梅本をあからさまに笑うのは失礼な気がして、必死で堪えた。細い両腕を大の字に広げているので、骸骨がソファーに垂れかかっているようにも見えた。

「わかりましたから…。絶対に動かないで下さいよ。」

智美は恐る恐る近付いた。急に起き上がられて顔を近付けられはしないかと警戒しながら覗き込んだ。梅本はまだ目を大きく見開いていた。顔を見ると再び笑いが込み上げてきた。目薬を少し高い所から垂らした。すると、狙いは外れて梅本の眉毛の上に落ちてしまった。「智美ちゃん、殺生やわ。ワシの目はそんなん上と違うで！」そんな事を言われたものだから、智美は堪えていた可笑しさを一気に爆発させてしまった。

「アハハハハハ…駄目です。梅本さん面白すぎますよ。これ以上は無理！やっぱりご自分でやって下さい。」

「なんや、冷たいなあ…。ワシ、事務所までわざわざ来たのに…言う事聞いてくれへんのか？」

梅本は拗ねたように口を尖らせて言った。

「いえいえ、別に嫌とかいうんじゃないですよ。でも、私は下手くそなので無理みたいです。ゴメンなさい。あつ！そうそう。岩崎部長なら上手くやってくれるんじゃないですか？私、呼んで来ます。」

智美は事務所に走って行こうとした。すると梅本は急に起き上がった、

「かまへん、かまへん。ワシ自分で注すよつてに、呼ばんでええわ！」

と慌てて言ってきた。

「なんだ、最初からそうすればいいのに…」と智美は思ったが、みんなから煙たがられている岩崎の名前を出したのは、我ながらナイスな対応だったと満悦した。何しろ岩崎は『仏頂面した部長』と言われるほどに愛想の悪い顔付きをしていたからだ。このようなやり取りが日常茶飯事にあつたので、梅本が手のかかる事は珍しい事ではない。お年寄りを大切にする事をポリシーとしている智美にとつては、少々嫌な事でもやってあげなければ…という心情が働くのだ。

「任さんかい！」

と意気揚々と作業場に向かう梅本を見送りながら、智美は買っても

らったポーチを携えて事務所に戻るのだった。

キンコンカーンコン 「やっと昼休み！お腹空いた」

チャイムが鳴ると、智美はすぐに女子従業員が集まる休憩室へと向かう。するとチャイムが鳴り終わらないうちに智美の携帯電話が鳴った。携帯の着信表示を見ると、登録されてない番号だった。智美は間違い電話だろうと思って出なかった。しばらく鳴った後に電話の着信音が止んだので、さほど気にも留めていなかった。

「今日は何のお菓子を食べようかな？昨日、中嶋君からもらったチョコパイにしようっと！」

ジューズも毎日のようにご馳走してもらっていたが、昼休みに食べるお菓子も毎日切れる事はなかった。パチンコ好きなおじ様から勝った景品をもらったり、毎朝智美のところへお菓子を持って来てくれる中嶋もいた。その上月曜日ともなると、誰かしら旅行に行ったお土産を買って来てくれたので、事務所の冷蔵庫はお菓子が賑やかに並んでいた。一人では到底食べ切れないお菓子を、昼休みに女子達でお喋りしながら食べる時間が会社にいる中で一番楽しいひと時であった。会社の環境も上司達にも決して恵まれてはいなかったが、食べ物だけには福がついていた。みんなとキャツキャツお喋りしながら笑っていると、再び智美の携帯が鳴った。番号は登録してない相手からだ。先程と同じ番号のようだった。智美は警戒しながら、出してみる事にした。

「もしもし……？」

「はっはぁーん。これで番号わかったぞ。」

「梅本さん？どうして……」と言ったとたん、智美はハッ！と気付いた。あの時だ。ポーチを購入した後に梅本に電話をかけたではないか。智美はしまった（くー）と思ったが後の祭りだ。

「ワシの電話触ってたらな、着信が出てきたんや。そしたら智美ち

やんこの前電話くれたよつてに、この番号違うかな？と思ってかけてみたんや。自分さつき電話に出やへんかったやろ？」

「あら、そうでした？気付かなくて……」

智美は悪い予感で会話どころではなかった。

「番号を知られてしまった。よりによって梅本に……どうしよう？」

頭の中は憂鬱でいっぱいだ。梅本は次々と話しかけてくる。きつとこれからは、始終かかってくるだろう。楽しいはずの昼休みが一気に暗い気分になってしまった。反省していた。迂闊な自分の言動を恨んで、自身を責めていた。昼休み、みんなと話しているから……と言つて、ようやく電話を切ってもらった。午後からの仕事は集中出来なかった。現場で梅本に会つと、首から携帯電話を提げていた。そして嬉しそうに携帯を持つて、左右に振つて見せた。智美は苦笑しながら、さつさと現場を去つた。着信拒否をするのはたやすい事だ。しかし、毎日顔を合わせる上に智美には色々と気前よく買つてくれる梅本に対して、それはあまりに失礼なように思えて気が進まなかった。

「何かよい方法はないかな？梅本さんも気を悪くしないで、電話をかけてこなくなる方法が……」

その日の夜もちゃっかり梅本から電話がかかってきた。

「おう！智美ちゃんか？ワシや。今風呂に入りながら電話してるねん。風呂入つて気持ちよくなつてきたら、智美ちゃんの声聞きたなつてなあ〜今家に一人か？」

「はい。」

「そうか、それなら話は早いわ。あのな、ワシ思い切つて言うけど、智美ちゃんの事愛してるで〜ハハハ。」

少し照れたような言い方だったが、決してかわいいものではない。むしろ、骸骨が湯舟に浸かつて電話をかけてきている姿を想像すると、背筋に寒気が走った。「そんな事言われても困ります。私は会社の仲間としか思つてません。」

「なんでや？智美ちゃんには、ワシ尽くしてるやないか。他の女の

子にはあんねん色々と買ってあげてないで。今度一回デートしてや頼むわ。」

「だから、予定が詰まってるってお断りしたでしょ？」

「そんな冷たい事言わんといてえな。一回だけでええから、なっ？」

「無理です。」

「なんでや？」

「会社でのお仕事なら快く受けます。でもそれ以上の事は迷惑なんです。電話も困ります。用事があれば会社でお願いしますよ。」

「そんな言わんと。あつ、石鹸で手が滑るよってにまたかけるわ愛してるで。」

「もう、かけてこなくて結構ですから……」

プーツ、プーツ、プーツ……最後の言葉は聞いてないようだ。智美は益々落ち込んでいた。あれ以上ハッキリ言うのは智美には出来なかった。上手く伝えられない自分に腹が立つ。智美は会社に行くのが今まで以上に憂鬱に感じた。

次の日、智美は極力梅本と顔を合わせるのを避けた。書類を配ろうとする休憩室に梅本がいると、素通りして、時間をおいてから再び配りに来た。現場の遙か向こうに梅本がいると、その道はやめて別のルートを通るようにした。

「なんで私は、こんなに気を遣っているんだろう？」智美は、薄暗い現場を歩きながら思った。

それからしばらくの間、梅本はたいした用事もないのに、度々智美に電話をかけてきた。無視して取らない時もあったが、智美自身もどうしてよいのか煮え切らない自分に苛立ちを感じていた。しばらく

く取っていない日が続いた朝、智美が製造課の事務所で仕事をしていると、携帯が鳴った。番号を見ると、登録していない梅本からのものだとハッキリわかった。なかなか出ない智美に、隣で仕事をしていた斉木が、

「電話出ないんですか？」と聞いてきた。斉木は事務をしながら現場も手伝う、将来の幹部候補生の一人であつた。大学を卒業してまだ一年しか経ってなかったが、なかなか常識をわきまえている若者だと、智美も一目置いていた。斉木に聞かれて戸惑っていた時、智美はひらめいた。

「あつ、ちよつと事情があつて…あのね、斉木君。何も聞かんとこの電話に出てくれない？『もしもし』だけでいいから…何か言ってきたら、『どちらさんですか？』って言うて！お願い！」

智美は切羽詰まった表情で口早に言つた。斉木は少し事情を察してくれたようので、何も言わずに智美の手から携帯を取ると、

「もしもし」

と言つてくれた。しばらく何も話さないで黙っていたが、数秒経つた後

「はい。もう繋がってないから大丈夫です。」

と言つて携帯を渡してくれた。智美は完全に切れているか画面を確認して、初めてホツとした。

「変な事頼んでゴメン。助かったわ。ありがとう。で、電話の相手は何か言つてた？」

「ああ…慌てた様子で、『わ、わ、私、間違いました』って言うてましたよ。」

「へえ、そんなに慌ててたの？」

「はい。慌ててそう言つたと思つたらすぐに切れました。」

電話口に男性が出て、梅本がどんなにびっくりした事だろう。想像すると、智美は急に可笑しくなつて、大きく口を開けて笑つた。

「迷惑電話ですか？」

「そう。迷惑な上にしつこい電話やつてん。多分これでかかつてこ

ないと思うけど、仕上げにもう一押ししておかないとね。」

そう言って悪戯っぽく笑った。斉木もその顔が面白かった様子で、一緒に笑った。

智美は、梅本が作業している前を堂々と歩いた。その姿を見つけた梅本が、すぐさま走って来た。

「智美ちゃん、自分全然携帯に出てくれへんやないか。どないってるねん！」

「えっ！携帯？最近梅本さんからはかかってきてないですよ。」

「ワシ、今日の朝もかけたんや。そしたらおっさんが出よったがな。」

若い斉木君を『おっさん』呼ばわりしたので、智美は吹き出しそうになったが、ここで演技を終わらせては、計画が台なしになる……。

「おっさん？あゝ。そうなんですか？私最近携帯を買い替えたんですよ。ほらっ。」

智美は前と同じ携帯を、さも新しく買った携帯のように揺らせながら見せてみた。

「なんや。新しい携帯になったんか。はっはあゝん。それでつながらへんかった訳や！」

「ええ。こっちの新しい方が使い勝手が良くて。」

「新しい番号、教えてくれ。」

「ゴメンなさいね。梅本さん。これは家族との連絡手段として買ったものなので、他人には教えられないんです。ご用の時は会社で直接伺いますから、申し訳ありませんね。」

「年寄りをいじめるんか？」

梅本はイジケてそっぽ向いた。

「いじめるなんて、とんでもない！梅本さんが計算出来ない時はいつだってお助けしますよ。遠慮しないで聞いて下さい。でも、プライベートは会社とは別にしたいんです。わかってくれますよね。」

智美は小さい子供を諭すように、ゆっくりと丁寧に話しかけた。梅本は何も言わずに作業に戻った。

その日、梅本は早退をしたようだ。それから三日間、無断欠勤をした。仕事がお世辞にも出来るとは言えない梅本だったが、無断欠勤して選別作業が遅れている事は、課長である丸山の怒りに触れていた。智美は電話の番号を教えなかった事と関係あるかな？と少し心配になったが、取り越し苦労だろう…と自分に言い聞かせていた。休み出してから四日目に、梅本は精彩を欠いた顔付きで出社してきた。骸骨だった風貌が、余計に痩せこけて貧相に見えた。…多分風邪でもこじらせていたのだろう…と智美は思った。忙しい朝は、梅本に声をかける暇もないほどだった。バタバタ走り回っていると、上手い具合に梅本が向こうから歩いて来た。

「梅本さん！随分お休みをされてましたけど、体調でも悪かったのですか？」

智美の問い掛けに梅本は聞こえなかったように顔を背けて、足を止める事もなく行ってしまった。いつもなら、嘘か本当か理解し難い冗談で言い訳をしてくるのに、今日は様子が違う。でも、声をかけたのに無視をする梅本の態度に智美は立腹した。

「そっちがそういう態度なら、敢えて話しかけませんよーだ。」

智美はそれからは梅本がいても空気のように扱った。休憩室で梅本が何人かの現場の人達と休憩していても、他の人と一言二言話してすぐに出て行った。現場で出会っても梅本が顔を見てこないのので、挨拶だけして足早に歩いて行った。何日かそういう態度で接した。梅本の夢を見ているような眠たい冗談を聞けないのは、智美にとっても寂しい事ではあった。しかし、しかとをしてくる梅本に、話してもらおうと機嫌を取るほどの相手でもない。智美には梅本と話さなくても、楽しく笑える仲間がたくさんいた。だから、取るに足りない些細な事だった。

その日の午後も、お偉い様会議があった。智美は昼休みに食べたお弁当とお菓子で満腹になり、頭もぼんやりと超心地良く、眠りにつきたい気分であった。一人で仕事をしていると、刺激もなくて睡眠薬を飲んだように瞼が下がっていく。

「あかん！本当に寝てしまいそう…」

智美は自分の頬つぺたを2、3回叩いて気合いを入れた。誰かが階段を昇ってくる足音がする。欠伸をしそうな顔を必死で堪えながら、仕事に集中した。何も言わずにドアが開いた。振り向くと梅本だった。智美は軽く会釈だけしてパソコンに入力を始めた。梅本は黙ったまま、空いている智美の横の席に座った。

「何かご用ですか？」

パソコンの画面を見たままで智美が聞いた。

「最近智美ちゃん、ワシを避けとるやる？」

「そのお言葉をそっくりそのままそちらにお返しします。」

「自分、ほんまに冷たいなあ…」

「私は至って年長者は大切にしているつもりですが…」

「あのな、ワシこの前から何日か休んだやる？あれ、なんでかわかるか？」

「さあ？だつてお聞きしたのに答えていただけませんでしたから。」

「あれな、ワシ智美ちゃんに電話替えられて連絡つかへんようになったやる？それで、新しい番号教えて言うたら『あかん』つて断ったやる？ワシ、あれがショックでショックで力入らんようになったんや。」

梅本はいつかのような憐れみたっぷりの顔付きで話してきた。

「まあ、それはお気の毒でした。でも、私は会社の方とは誰とも連絡先を教え合っていないですよ。公私混同はしない主義なんです。」

「それは、もうええねん。せやけど、一つだけお願いがあるんや。聞いてくれるか？」

智美は嫌な予感がした。慎重に受け応えしなくては、再び智美のせいで会社を休んだ…と言われかねない。

「聞くか聞かないかは、お願いにもよります。何でしょう。」

梅本は体を摺り寄せて近き、小さな低い声で、

「智美ちゃんのパンティくれ。今すぐに…今はいてるのを脱いでくればらええわ。」

智美は背筋が凍りそうになるくらい身の毛がよだった。

「無理です！絶対に嫌！！」

智美は首を振りながら手でもバツテンをしながら拒んだ。

「一枚くらいええやないか。脱いでもスカートやさかい、誰もはいてないのわからんわ。なつ、はようワシにくれ。」

益々近付いて耳元で囁いてくる梅本に智美は、

「これはセクハラですよ。やめて下さい。」

「ワシにカタカナ言うてもわからんわ。明日でもええわ。なるべく古くてはきこなしてるのを頼むわ。何ならシミついててもええで。」

智美は、首を振る以外に言葉が出てこなかった。

「ほなあ、頼んどくで」梅本は陽気に出て行った。智美は、今言われた言葉を頭に巡らせながら呆然としていた。そして、これがいつもの冗談でありますように…と願うのだった。

第4話 サプライズ人事！！

日差しがやさしい春となった。相変わらず梅本からのパンティ攻撃はあったが、智美は冗談でしょ？と軽くかわし、申し出をすかしていた。そのうち無理だとわかれれば諦める違いはない。出口が見えない根競べに、智美は「負けてなるものか！」と意志を強く固めるのであった。四月に入り、恒例の有休休暇の残日数と本年度に新しく入る日数の合計が、食堂の掲示板に貼り出されていた。

「去年あまり休まなかったから、かなり貯まってきたはずだけど……。今年は有給休暇何日ももらえるのかな？」

智美は、千佳や桃子達と一緒に有給休暇の日数を確かめに二階へと急いだ。すでに情報の早い現場で働く人達は何人か群がって、紙を見ていた。智美達もその後ろから覗き込むように背伸びをして、自分の名前を探す。そして、32日という数字を確認して、

「よし！30日を越えた」

と今年は連休でも取って、旅行をしようかな……と思いを巡らすのであった。

お昼休みに智美はみんなとお弁当を食べていると、淑子が慌てた様子で走ってきた。

「智美さん、ちょっとこっちへ見に来て下さい。」

「どうした？」

「有休の用紙が……。とにかく来て下さい。」

食べかけのお弁当にふたをして、智美は有給休暇の取得日数を貼つてある掲示板へと向かった。

「ほらっ！ここを見て下さい。」

淑子が指さした先には0の数字を赤くマジックペンで囲んであった。左横をたどってみると、新垣の名前があった。それは、前年度の有休が何日残っているかという欄だ。そういえば、昨年の新垣はよく休んでいた。村のどんと焼き（お正月の飾りを燃やす行事）がある

からと言つては休み、神社の掃除があるからと言つては有休を取っていた。その上、田植えや稲刈りには必ずまとまって休んでいたし、去年は御祖母様の身体の調子が悪いことを理由に、度々休んでいた。「おばが危篤やから帰るわ。」

と二三日休んだ後に出勤してきて、

「御祖母様はどうですか？」

と尋ねると、

「おばは、死なない病にかかってしまいました。」

というブラックジョーク。女子従業員は返す言葉に戸惑っていた。そのジョークにうけたふりをして笑うのが精一杯だった。事務所で働く部下達は、

「本当に危篤なのかな？怪しいなあ。」

と新垣に聞こえないように囁いていた。智美はそんな部下達にいつも尋ねられた。

「村の行事つて、平日にもあるもんなんですか？」

「さあ？？私は村に住んでないから詳しくはわからないけど……」

と首をかしげて作り笑いをしていた。しかし、度々休もうが、長期休暇をしようが困る事は何も起こなかった。新垣のパソコンはデスクトップのまま、開かれる事なくただひたすらにらめっこをしている状態であつたからだ。この赤いマジックで囲まれている事が何を意味するのか？智美には充分わかった。しかし厄介なのは、この事が新垣に知られた時の彼の行動だ。淑子もそれを危惧して智美を呼びに来たのであろう。「これを新垣さんに見られちゃ駄目よ。淑子ちゃん、この用紙剥がして！」

「は、はいっ。」

おまじない
大事になるのを恐れて、有給休暇の取得日数が示された用紙は、すぐさま掲示板から外された。そして、その用紙は張り出した総務の静江の手に渡された。

「これ、どうしたらいいと思いますか？」

「とりあえず、大木さんに外した事を報告しないといけないよね。」

勝手に外したと思われても困るし。」

「大木さんに言わないといけませんよね。あまり気が進まないけど、仕方ないですね。」

静江は、重たい気分を振り払うように勢いよく受話器を上げた。新垣が席を外していたので調度良いタイミングであった。

「もしもし、大木さん？あの…実はこの前に張り出した有休の用紙なんですけど、落書きされていたので外したのですが…」

「落書きって何なん？誰が書いたん？」

「それはわかりません。でも、新垣さんのところに印がつけられてあつて。」

「新垣の？それはどんな落書きがされてるん？」

「新垣さんの有休残日数のところが囲まれています。」

「それは何で囲まれてるん？」

「おそらく赤の油性のマジックだと思います。」

「赤？どんな太さのなん？」

「はいっ…あのう…中細くらいかと…」

横で聞いていた智美にも、大木が必要以上に関心を示しているのが分かった。静江は智美の方を見ながら、整った顔を歪めていた。どうやら、オーディションの時の知りたがり炸裂しているかの如く、根掘り葉掘りと質問攻めをしている様子だ。静江から色々と聞き出した揚げ句の果てに、その用紙を大阪の事務所にファックスするように…との指示があった。いつも虚勢を張っている新垣が、嫌味たっぷりに有休がない事を示されたのが、大木にとっては相当愉快なネタとなったのだろう。しかし、大木も新垣の気の荒さを警戒して、「この事は誰にも言わないように。」と注意があった。

「特に新垣には絶対に報さないように…」

との駄目だしまでついた。そんな事とは知らない新垣は、いつものように鼻歌を唄いながら事務所に入って来た。一瞬静江と智美は凍りついたが、新垣は、

「今日はええ天気やなあ。静江ちゃんこんな日に仕事してたら笑われるで！もう、帰ってくれてもええわ。」

「ど、どうも…」

静江は引き攣りながら、やっとの事で笑顔を作った。新垣は気楽そうにそのまま、唄いながら自分の席に戻り、隣の席の千佳にも何やら冗談を言っていた。

「知らぬが仏って言うのはあの事ですね。」

新垣の気楽な様子を見ていた静江が呟いた。

「本当にそうやね。この事を知ったら、新垣さん暴れるよ。」

二人は顔を見合わせてゾクツと身震いをした。新垣は、ユーモアを持っていたし人を引き付ける話術があつた。テンポよく話すので、頭の回転が早いなあ〜と智美はいつも感心していた。しかし自分に不都合な事があると、あからさまに機嫌を損ねた。普段は明るくて楽しいキャラをしているのに、一気に暗くなり、周りが気を遣って話しかけても無言のまま何も開かれていないパソコンの一点を見つめているのだった。斜め前の席の桃子には、その目が恐ろしくて仕方なかった。また、気に入らない人がいると、人気のない会社の裏庭に呼び出して胸ぐらをつかんだりもした。そういう極端な性格を知っているからこそ、大木は新垣に対して気遣いを怠ってはいられないのであつた。FAXされた用紙を見て、さぞかし大阪ではこの話題で盛り上がっている事だろう。みんなが怒らせないように気を遣って接している新垣に、このような挑戦的な事をするなんて、勇気があるのかただの怖い者知らずなのか？いずれにせよ、智美は穩便に何も起こらない事を願うだけであつた。

「毎度〜。」

お決まりの挨拶で大木が工場にやって来た。大木は荷物も置かずに、すぐさま静江のところへ歩いて、

「この前の用紙ある？」

と聞いた。静江が鍵のかかる机にしまつてあつたので、鍵を開ける間せつかちな大木はそのままロッカーへ着替えに行つてしまった。作業衣のボタンをかけながら近付いてくると、

「これが例の物か…」

と呟くと、

「これを最初に見つけたのは誰なん？」

と静江に聞いた。

「智美さんが持つて来てくれました。」

静江は助けを求めるように智美の方を見た。

「ああ…最初に見つけたかどうかはわかりませんが、お昼休みに淑子ちゃんが無知なことを知りましたよ。」

「ふうん。これを掲示したのは何時なん？」

「工場長からいただいて、すぐに貼りに行きましたから、9時過ぎで…」

静江が答える途中で、大木は言葉を遮つて急かすように聞いてきた。

「上原さんは、これを見たのは昼休みが初めてやった？」

「いいえ、貼り出されて30分くらいしてから見に行きました。千佳ちゃんと桃子ちゃんも一緒に…」

智美も答え終わるまでに、遮られた。

「その時は、この赤い印はあつたん？」

「いいえ、気がつかないただけかも知れませんが、なかったと思います。」

「ふうん。いつ書かれたんやろ？」

大木はしばらく、用紙を手にとってじつと眺めていた。そして、

「この赤い油性のマジックで、どこの部署が使うん？」

と聞いてきた。静江と智美は、

「さあ…？どこで使われてるんでしょうね。」

と答えた。しかし、智美はそれがどこの部署で使われるかは見当がついた。しかし、犯人捜しの手伝いをして、騒ぎが大きくなるのは

避けたかったので、静江と一緒に首を傾げておいた。「製造の現場で、赤いマジックは使っくん？」

きたきた！ やっぱり探っている。智美は、

「基本的には黒いマジックを渡してますが、赤いのが好みの人も見えるかも知れませんか。」

と笑顔を作りながら言っておいた。

「まあ、この紙は僕が預かっておくわ。」

大木はそう言っていると、自分の鞆へと収めた。そして、いつものように用事があるわけでもなく、事務所をウロウロと歩き回り、ついには新垣の席に話し掛けに行った。

「なんかさあゝ取り調べ受けてるみたいやったね。」智美が静江に小声で言った。

「人に聞いておいて、最後まで話し終わるまでに質問をかぶせてくるなんて、失礼ですよ。」

智美は深く頷きながら、笑いかみ殺して新垣と話している大木を見た。笑いは抑えていたが、それはどこか愉快そうに見えた。

智美はいつもの如く、変わり映えのしない薄暗い製造現場を歩いていた。今日も空気が薄かった。おまけに酷い臭いは目にもきた。異臭が鼻から入ると、その刺激で目や喉にまで不調が出てくる。智美は鼻を押さえながら速足で現場を歩いたが、覆いきれない目からは開いていられないほどの痛みで涙を流しながら書類を配った。

「智美ちゃん！」

大きな声で呼ばれた。涙目をハンカチで拭いながら声の主を探すと梅本だった。梅本は何故か頬つぺたを押さえて、「もうダメだ。」という顔をしていた。

「こんにちは。今日の空気酷いですね。」

智美は話するとコホツと噎せ込んだ。

「ワシら可哀相やる？こんな環境の中でこき使われて、給料は下が

る一方や！」「大変ですね。」

いつも智美にパンティをねだる梅本にうんざりしていたが、この環境で作業をしているのは本当に気の毒に思えた。

「今日は朝から歯が痛うてなあ。ご飯が嚙まれへんのや。」

「あら、朝ご飯を召し上がられてないのですか？」

「そうや。」

「ご飯も食わずに作業をされては倒れてしまいますよ。」

智美は梅本の骸骨のような身体が余計に骨をあらわにしていく事を想像すると、歩きたびにカタカタと音を立てるのではないかと考えた。

「智美ちゃんは優しいなあ。」

「いえいえ。工場の環境が厳しいのに、その上ご飯も食べてないのでは体にはよくないなあと思っただけです。」

すると梅本がじつと智美の顔を凝視した。智美はパンティをねだられる…と思い身構えた。

「智美ちゃん、ニャンニャンしてくれるか？」

「えっ！？ニャンニャン？猫の真似ですか？」

梅本はすぐに吹き出した。「違いますよね。びっくりしました。で、それは何ですか？」

「ワシ、歯痛いよって、智美ちゃんが代わりにご飯嚙んでくれてニャンニャン飯にして欲しいんや。それを口移ししてくれるか？」

「はあ…？無理です。なんで私が…」

「ワシ、智美ちゃんにして欲しいねん。」

このエロ親父、何を寝ぼけな事を言ってるのか…と智美は呆れたが、ニャンニャンという言い回しが可愛いかったので、いつもよりは腹が立たなかった。

「できない事は上司の丸山課長に相談して下さいね。きっと何か考えて下さるでしょうから。」

「丸ちゃんか？あれはあかんわ。仕事も出来へんし、温泉や！」

「温泉って？」

「湯（言う）ばかりや！」

「アハハ…梅本さんにしては上手い事言うじゃないですか。」

「こりや智美ちゃんは厳しいなあ」

「そうなんです。私は厳しい女なんですよ。だから、ニャンニャンもお断りいたします。」

「そんな殺生な。」

と言う梅本をそっちのけに、智美は一刻も早くこの現場を逃げ出したかった。今日は酷すぎる。むせ返りそうな臭いを堪えながら、智美は

「お大事に。」

とだけ言って現場を歩く足を早めた。

短い春が、駆け足でもするように通り過ぎて行つた。暖かいと感じるのはつかの間で、この工場は夏が長いのだ。機械から出される熱が拍車をかけて、工場の中はすぐに40度に達した。そこはまさに灼熱地獄だ。そして、益々休憩室は満員になる。その上、暑い現場で機械の管理をせずに、休憩ばかりして冷たいジュースを飲みまくるものだから、老若に関わらず、お腹を壊して欠勤する者が多数いた。だが不思議な事に、暑過ぎる工場の中で未だかつて『熱中症』で倒れる者はいなかった。そんな極限になるほど頑張る意欲のある者などいない。現場作業者は、自分達の上司を見習っていた。5時になると上司の部屋の電気は消えていた。そして、定時に帰るのが少し後ろめたいのか、鞆をゴミ袋に隠し、さもゴミを捨てに行きます…というパフォーマンスまでしてこっそりと会社から姿を消していたのだった。そうなれば、現場の者達のパラダイスである。6時以降の現場には作業員が一人も居ないのだ。ただひたすら、機械が騒音を上げて動いている。刺激臭と熱い製品から出る湯気で、現場は白く霞んでいた。放置された製品が機械から垂れ流れてド

ンドン下へと落ちている。グレーの暗い色の床に落ちたその製品は、製品の形になれずに団子のように固まっていった。このままでは、ロスが増えて無駄になってしまう。しかし、この緊急事態に対応すべき作業員は誰もいなかった。智美が休憩室を開けると、所狭しと皆が休憩を取っていた。お腹が減ったのか、パンをかじる者。暑さのためにかいた汗をエアコンの前で張り付いて乾かしている者。何人かでトランプをしているグループもいた。そんな騒がしい中で爆睡している若者もいる。しかし、この休憩室の中は現場の中以上に酷かった。煙草の煙りがもんもんと渦巻き、息苦しさはこの中の方が上回っていた。どこかうだつの上からない輩達のたまり場に似たこの状態に、智美は言つのを躊躇ったが、勇気を出して、

「すみません！機械から製品が下に垂れていますよ。担当の方はおられませんか？」
と言ってみた。

「ああ、構へん構へん。ほつといたらいつかは終わるわ。」
と暢気な返事が返ってきた。そして、相変わらずパンを食べたりトランプしたりと何もなかったように、自分の時間を楽しむのであった。この対応には智美も呆れたが、管理すべき上司達が、怖い者に追われるようにして定時で帰る様子を見てみると、こういうモチベーションになるのも致仕方ないように思えた。

次の日、とても驚く事態を聞かされた。新垣が事務所の課長を解かれ、製造の課長として配属されると言うのだ。正式な発表はまだなされていなかったが、そのような噂が回る早さだけは、何処の会社にも負けなかった。製造はこの時、丸山が課長として職務を遂行していた。そうなれば、製造課長が二人出来る事になる。どういう事なんだろう？それよりもプライドの高い新垣が製造に配置転換になるのは、どう受け止めるのであろう？智美は新垣の態度を心配した。

朝、ロッカーの中ではその話題で持ち切りだった。静江は、

「やはり、あの落書きの事が大きかったのでしょうか？」

と聞いてきた。

「それだけではないだろうけど、あの事務所での仕事ぶりでは今回の事は仕方ないやろうね。」

「そうですね。」

この件に関しては、みんな同意見だった。だが、新垣の機嫌を恐れる女子従業員達は、どのような態度で接すればよいのか？を思案していた。そして、正式な発表があるか、新垣から言い出すまでは知らない態度を通す事。聞いた時は、

「えっ！嘘でしょ？」

と驚いたように言う事を決めた。

朝の工程会議で新垣は、製造異動を正式に発表された様だった。会議が終わると、いつもの冗談も鼻歌もなく、背中を丸めてうつむきながら事務所へと戻って来た。そして、横に座っている千佳と斜め前の桃子に、

「長い間、お世話になりました。」

と小さな声で言った。千佳は知らない態度を守りながら聞いた。

「えっ！？お世話についてどういう事ですか？」

「私は、この度製造に飛ばされる事になりました。この席ともお別れです。まあ、みなさん頑張って下さい。」

「えっ！嘘でしょ？」

台本通りに桃子が驚くと、新垣は続けた。

「私は岩崎に嫌われて、追い出される事になりました。みなさんは嫌われないように、せいぜい胡麻でもすって置いて下さい。」

と皮肉たっぷりの口調で言った。これには二人とも対処に困った。沈黙の時間が流れていると、新垣の目にはうつすらと涙がおおっていた。何も開かれていないパソコンを見ながら、新垣は視線を一点に集中させて涙を零さないように、必死で堪えているようだった。

「でも新垣さん、お辞めにはならないでしょ？」

桃子が慌てて聞いた。

「岩崎がいる限り、この事務所に来る事ないでしょう。さようなら。」

さようならという言葉が強調おされて言われて、千佳と桃子は顔を見合わせて困っていた。そこへタイミング良く岩崎が席に戻ってきたので、この話は途絶えた。新垣は相変わらず険しい顔をして、パソコンを眺めていた。いつもはキーボードをたたかずに、パソコンの縁に指を置いて、パタパタしていた。向かえに座っている岩崎には、キーをたたいているように見えたかも知れない。それは、小さな子供がピアノの練習をするような指の動きだった。だが、今日はそれすらしていなかった。虚勢を張ってる態度は息を潜め、いつもの活舌のよい冗談も出てはこなかった。智美は遠くから、背骨を丸めて幾分小さく見える新垣の背中を眺めていた。そして、以前から新垣の仕事ぶりに疑問を抱きながらも、事務所に居させていた大木が、新垣を製造に異動させたのは、あの赤い印が後押ししたに違いないと思った。新垣を恐れて踏み切れなかった事を、たやすく実行させたあの印をつけた主は、あっぱれだ…と智美は感心した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5576d/>

会社ごっこ

2010年12月23日02時12分発行